



〔白老町〕

ウヨロ森づくりの会

〔報告者〕



佐藤精一さん



里山の放置人工林整備の取り組み

大きな木を残して森林を育てたい

私たちが活動している萩の里自然公園・ウヨロ川周辺地区は、環境省の「重要里山里山選定地」(平成27年)にも選ばれている素晴らしいエリアです。周辺には白老牛の放牧地や雑木林・カラマツ人工林などが点在し、秋に川沿いのフットパスを歩くとサケの自然産卵を観察できます。

ここで環境保全を担っているのが、地元のNPO法人ウヨロ環境トラストです。始まりは平成13年、それまで手入れされずうっそうとしていた2.2haのカラマツ林を取得したことでした。「トラストの森」と名付け、会員たちが自分たちの手で枯損木の整理や枝打ちなどを始めました。NPOはその後、「トラストの森」のまわりの私有林、合わせて約10haの所有者たち(個人所有者9人、企業1社)と森林保全協定を結び、林野庁の助成を受けるなどしながら手入れを進めているところです。

6年前、町内在住の森林所有者の一人から「自分の山のカラマツが主伐(皆伐)期を迎えているが、大きな木はこのまま残して森林を育てたい」とNPOに相談がありました。そこで新たに、所有者とNPO・NPO役員で構成する「ウヨロ森づくりの会」を設立し、この交付金制度を利用して間伐に着手することになりました。

平成25年度以降は3年ごとに計画を変更しながら活動地域を拡大し、現在は12年~62年生の広葉樹天然林・カラマツ人工林など、計11.24haの森の間伐をしています。

針広混交林としての成長に期待

間伐は、伐採・枝払い・玉切り・集材の手順で実施しています。刈り払い機やチェーンソーの使用に当たっては、林業指導経験者に講師を務めてもらって、毎年安全講習を開いています。

白老ではシカ食害が増加しています。道内では電気柵を導入する地域が多いと思いますが、ウヨロ川はサケの産地でもあるので、海の漁師から古い定置網をもらってきて二重に張りめぐらせるなど、

独自の工夫をしています。

森から運び出したカラマツ間伐材は、用材・チップ材として地元の木工場に販売しています。平成25年度以降に約90立方mを出荷し、48万円ほどの収入になりました。収益は所有者に還元しています。こうした取り組みの結果、特に個人所有林は、間伐と笹刈りによって日光の差し込む明るい森に変わってきました。

活動エリア内に砂利採取場の跡地があり、これまでそこに植林したことはなかったのですが、隣接するカラマツ林から種子が自然散布されたらしく、カラマツの天然更新がみられるようになってきました。植え替えなしで育っているせいか、この場所のカラマツの成長はきわめて良好です。

また「カラマツの長伐期施業」を実施しているNPO所有の森では、生物多様性に富む針広混交林としての成長に期待が持てるようになってきました。林床にギョウジャニンニクの群落が自然に増えています。目下の課題は、こうした活動を継続していくための体制を確立することです。現在は林業指導員OBの指導を受けながら作業していますが、今後は、立木調査や間伐木の選木といった技術を作業グループの中で習得・継承したいと思います。

またシカの食害が活動地全体に広がってきており、森林植生にまで影響が出始めているため、今後は全体的に網を張るなどの対策が必要ではないかと考えています。

11haあまりのこの活動地で、森林・山村多面的機能発揮対策交付金の趣旨に沿いながら、森林所有者を含む全員が自ら施業に参加しています。これらの会員ボランティアが今後も中心となって、豊かな森づくり、豊かな里山づくりを目指したいと考えています。

